

北海学園大学 経済学部

地域研修報告書 2007

平成19年度 私立大学教育研究高度化推進特別補助採択事業





2007年度『地域研修報告書』の発行にあたって

北海学園大学 経済学部長
小田 清

地域経済学科に開設されている「地域研修Ⅰ・Ⅱ」と経済学科「特別講義—地域研修Ⅰ」の目的は、「地域づくりの諸活動」を直接見聞・体験することによって、現実の生きた地域経済・社会を学習することにおかれています。すなわち、講義やゼミナール等で学んだ理論や知識をもとにしながら、地方自治体や民間企業、各種団体やNPOによる様々な「地域づくり」「マチおこし」「国際交流」などの取り組みに触れることによって、その地域が抱えている悩みや諸問題、あるいは地域づくりの良き事例に学ぶというものです。また、泊まり込みなどで地域住民との交流を深めながら、地域づくりに寄せる住民の熱い思いを学び取ることも目標としています。

これまでの経済学のイメージは「理論＝座学」が中心でしたが、近年では多様な学問分野を取り込んで幅を広げています。この「地域研修」もそのような広がりの一つで、本年度からは経済学科の学生も履修・単位認定が可能となるように「特別講義—地域研修Ⅰ」が開設されました。その成果の発表は履修者全員参加の下、ゼミ単位での「地域研修報告会」として行われています。その概要を『報告書』としてまとめたものが本冊子です。ご笑覧頂ければ幸いです。

なお、この地域研修は、その実績が認められ、昨年度から文科省の「私立大学教育研究高度化推進特別補助事業」として進められています。次年度以降はさらに充実した地域研修とその報告会となるように努力するつもりです。ご協力頂いた地方自治体や各種団体の皆様に深く感謝申し上げます。

C O N T E N T S

[目次]

浅妻 裕 ゼミⅠ2
ふるさと銀河線廃線の影響と過疎地の公共交通の今後
■研修地：北見市・網走市・陸別町

浅妻 裕 ゼミⅡ3
現場で学ぶ交通まちづくり
■研修地：堺市・大阪市・京都市

池田 均 ゼミⅠ4
造船業(函館どっく)、漁業(昆布養殖)、遺跡(大船遺跡)見学・研修
■研修地：函館市

池田 均 ゼミⅡ5
壮瞥町の農業
■研修地：壮瞥町

奥田 仁 ゼミⅠ・Ⅱ6
歴史と伝統が息づく函館の地域経済を学ぶ
■研修地：函館市

川村 雅則 ゼミⅠ7
「財政再建団体」夕張市における現地調査(見えない事実の発見)
■研修地：夕張市

川村 雅則 ゼミⅡ8
ハローワーク求職者調査にみる今日の職場労働の実態と再就職状況
■研修地：旭川市

北倉 公彦 ゼミⅠ・Ⅱ9
グリーンツーリズム・part4
■研修地：長沼町

小田 清 ゼミⅠ・Ⅱ10
外国人観光客増加に伴う地域への諸影響について
■研修地：倶知安町・同ヒラフ地区

高原 一隆 ゼミⅠ・Ⅱ11
ニセコから地産地消を考える
■研修地：ニセコ町

竹田 正直 ゼミⅡ12
人口減・公共事業費減の下、地域の持続的発展に貢献する企業の学習
■研修地：小樽市、余市町、石狩市新港西地区及び同市浜益区

西村 宣彦 ゼミⅠ・Ⅱ13
知床における持続可能なツーリズムと斜里町のまちづくり
■研修地：斜里町

二瓶 剛男 ゼミⅠ14
函館市の産業(造船・昆布養殖)および 壮瞥町の観光と農業
■研修地：函館市弁天町・白尻町および有珠郡壮瞥町

平野 研 ゼミⅠ・Ⅱ15
外国人労働者の現状と移住者の歴史、JICAを通じて発展途上国の現状を知る
■研修地：横浜市

古林 英一 ゼミⅠ16
サケ漁業を中心とした産業形成
■研修地：標津町

古林 英一 ゼミⅡ17
サラブレッド生産の産業的拡がり
■研修地：新ひだか町、浦河町、様似町

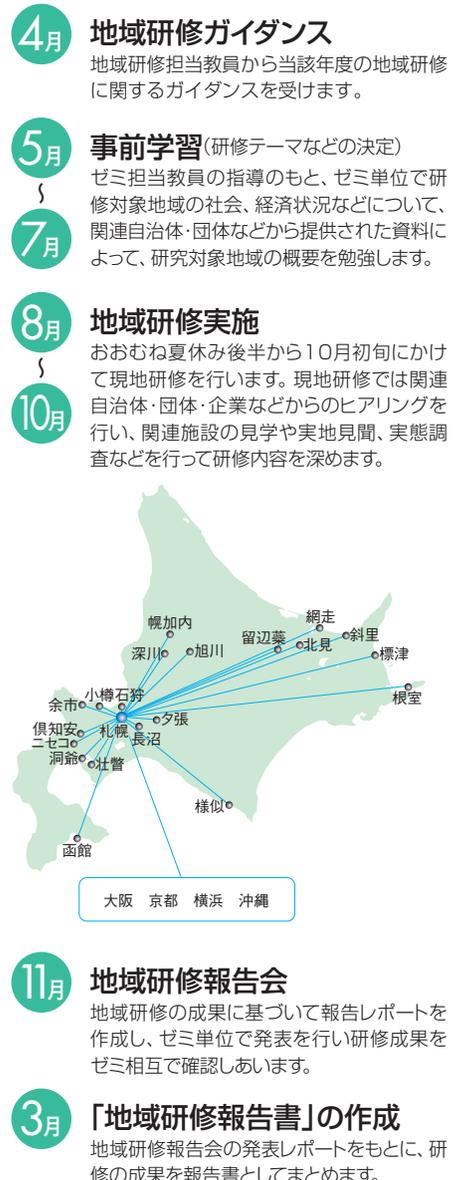
水野 邦彦 ゼミⅠ・Ⅱ18
朱鞠内の朝鮮人強制労働現場の見学
■研修地：幌加内町朱鞠内

水野谷 武志 ゼミⅠ・Ⅱ19
リサイクル社会の現状と課題
■研修地：北見市留辺薬町

山田 誠治 ゼミⅠ20
函館のまちづくりと地域メディア
■研修地：函館

山田 誠治 ゼミⅡ21
沖縄と地域メディアの役割
■研修地：沖縄

地域研修の流れ



地域研修 報告会

2007年12月8日・15日



「地域研修」は地域経済学科の特徴ある科目の一つとして、2004年度から始まり、今年度で4年目になります。初年度の研修は、石狩市や旭川市、夕張市、栗山町、倶知安町、西興部村など、札幌周辺自治体を中心としての地域調査が大半でしたが、2年目以降は、その反省と経験を踏まえ、より内容を深めた「研修テーマ」の設定が多くなりました。また、経済学科の教員・学生からの強い要望もあって、本年度からは「経済学部両学科の地域研修」として実施することになりました。その結果、研修範囲も全国に広がり、かつ本格的な地域実態調査を踏まえての長期間の地域研修も行われるようになりました。

その成果は「研修テーマ」に則してゼミ単位で蓄積され、先輩から後輩へと継承されつつあります。将来的には一つのまとまった「研究報告書」として公表すると共に、地域研修報告会を契機にして、経済学部ゼミナール討論大会へと発展できればと願ってお

ります。

本年度の「地域研修報告会」は12月8日と12月15日(いずれも土曜日・2講目)に実施されました。各ゼミの報告は、動画を挿入してのパワーポイントやOHPを上手に操って、内容の濃い本格的なものでした。これまでの報告経験が十分に継承されていることを実感しました。ただし、予定数を遙かに超えるゼミ報告があり、やむなく2会場に分けて行われた結果、濃密な研修内容を参加者全員が聞けなかったことは反省材料です。

次年度からは、さらに報告ゼミ数の増加が予想されます。その対策としては、報告回数を3~4回に増やし、報告時間に加え質問時間も設定して、地域研修の成果を全員が共有するようになりたいと考えております。各ゼミの次年度での益々の研鑽を期待しております。

(地域研修・担当責任者 小田 清)

浅妻 裕

ASAZUMA Yutaka Seminar I



浅妻 裕
経済学科
准教授

ふるさと銀河線 廃線の影響と 過疎地の公共交通の 今後

- 研修地
北見市・網走市・陸別町
- 研修期間
2007年9月8日～9月11日
- 参加学生数
15名

北海道では長期的に地方、特に過疎地の公共交通が衰退傾向にある。

最近では、2006年、ふるさと銀河線が廃止されている。我々は、廃線が地域の経済や社会に対して与えた影響や、今後の地方の交通を守るための取り組みを知ることを目的として研修を行った。ふるさと銀河線廃止は、地域にとっては大きな影響があったことがわかったが、一方で、市民団体や陸別町の廃線後の意欲的な取り組みを知り、また DMV に試乗することを通じて、今後の地方公共交通の可能性に触れることができた。

■ 報告資料:別冊資料編表2～P1に収録



JR北海道開発のDMV

学生報告



地域研修を終えて

地域経済学科2年
高橋 美絵(北海高校出身)

初めての地域研修では、北見市・網走市・陸別町などで地方における公共交通について学びました。北見市ではふるさと銀河線再生ネットワークへのヒアリングを行い、ふるさと銀河線に対する思いや銀河線廃止後どのような活動をしてきたのか詳しく説明していただきました。網走市ではDMVに試乗し、陸別町ではちほく高原鉄道動態保存計画と地域経済に及ぼす効果や転換バスと町内公共交通の現状と課題について学習しました。事前学習のときは主にインターネットや過去の新聞記事を利用して動態保存計画についての情報を集めており、鉄道廃止後から現在までの計画の動きについての情報がほとんどありませんでした。しかし、実際に地域研修へ行き、現地の方の生の声でお話を聞かせていただいたことで、学校に居ては決して知ることのできない知識や関係者の方々の公共交通に対する強く熱い思いを感じることができました。また、動態保存計画を行うことによって陸別町に観光客を呼び込み、町の活性化を目指す陸別町民の前向きな姿勢を感じることができました。

地域研修は学習してくるだけではなく、ゼミメンバーとの交流を深めることも大きな目的の一つであると思います。濃密でハードな4日間でしたがゼミメンバーと地域研修という貴重な体験ができて本当によかったと思います。この経験はこれからの大学生活や将来に大いに役立つ経験になると感じています。



地域活性化を目指す DMV

経済学科2年
阿部 祐人(旭川凌雲高校出身)

今回、私たち浅妻ゼミは北見や網走・陸別町・浜小清水など多くの場所を回ることができました。私はこの地域研修でDMVに乗車したことが大変印象に残っています。DMVは線路と道路を走ることのできる新しい交通手段です。このDMVはバスを改造した車両のため、運行の費用を抑えられるというメリットがあるということを学びました。一方、問題点としては1両に乗ることのできる人数が12人と大量輸送には向いていないということ、現在の制度の下では鉄道とバスの2名の運転手が必要なことなどの課題に対しては、もっと改良の必要があると考えさせられることとなりました。

また、私は東国原知事がのったシートにも座ることができ、このことにも嬉しさを感じました。そして、感動と同時に地方の公共交通について興味や関心を持つこともできました。鉄道が廃止されるということは、地域に暮らす人にとって生活の悪化を招き、過疎化を更に引きおこしてしまうのかもしれない。こういう現状の中で、交通の足を守り、地域の振興を守りながら、支えていくことが大切だと学ぶことができました。

今回の地域研修で、普段行くことのない場所で貴重な体験することができました。研究面以外でも様々な場所に研修行くことができ、毎晩みんなや先生と語り合うことができました。多くのことを学べた地域研修はかけがえのないものになりました。

浅妻 裕

ASAZUMA Yutaka Seminar II



浅妻 裕
経済学科
准教授

現場で学ぶ 交通まちづくり

- 研修地
堺市・大阪市・京都市
- 研修期間
2007年9月12日～9月16日
- 参加学生数
12名

現在、日本各地で公共交通の再編を通じたまちづくりが模索されている。これは都市経済への貢献や、大気汚染や渋滞などの都市問題解消、高齢化が進展する中での交通権の確保を狙ったものである。関西では、多くの組織がこの交通まちづくりに向けて活発な取り組みを進めており、この内容や成果・課題を把握するために現地を訪問した。欧州での路面電車の復活の事例に見るように、NPOが重要な役割を果たし、市民参加を実現することが重要であること等を学習した。

■ 報告資料:別冊資料編P1～P2に収録



LRT車両について学ぶ

学生報告



公共交通まちづくりの 携わる人々との出会い

経済学科3年
花房 藍 (北海高校出身)



KOALAの皆さんと記念撮影

私たち浅妻ゼミⅡは、欧米で広く普及し近年日本でも注目を浴びている、人と環境に優しい次世代型路面電車システムLRTの導入計画の現状把握などをテーマとして、4泊5日で大阪・京都を訪れました。

大阪では、実際にLRT導入を計画している堺市市役所でのヒアリングでその現状と課題について学び、近畿車輛株式会社にてLRTの軸となる低床車両LRVの製造現場を見学しました。また、さかいLRT研究交流センターで大阪産業大学の学生の皆さんと都市の路面公共交通やその社会的役割についてディスカッションしました。大阪では、関西地区における交通まちづくりのキーステーション形成を目指すNGO団体・KOALAの方々にお話をうかがうと共に、食事会にて交流を深めました。さらに、公害地域の再生を目指して活動するNPO・あおぞら財団の方のお話や文献資料などから西淀川地区の公害問題の歴史を学び、公共交通が環境に及ぼす影響への認識を高めました。今年は去年に比べ、より一層中身の濃い研修で相当ハードでしたが、ほかでは経験することのできない充実した時間を過ごすことができました。

また、研修の合間をぬって、USJや清水寺にもいくことができ、この点でも充実した研修でした。連日35℃前後という気温の中でクタクタになりながらもゼミの仲間と学び、交流を深め、大学生活における醍醐味を満喫することのできた4泊5日は、ゼミ生一人一人にとって貴重なものになったと思います。



都市の持続可能性と LRT

経済学科3年
中原 大樹 (北海学園札幌高校出身)



大阪産業大学グループとのディスカッション

浅妻ゼミは今回「現場で学ぶ交通まちづくり」というテーマで、大阪と京都にヒアリングに行きました。

LRT導入に向けた検討を行っている堺市のヒアリングでは、堺市の公共交通状況が南北方向に集中していることによる東西方向への機能の弱さから必要性がいわれていること、導入に向けては市役所側と市民側との合意形成が必要になってくるが、説明が市民にいきわたっていないという問題があり今後の課題であることを学びました。また、あおぞら財団では二酸化炭素の削減を目的としたエコドライブの社会実験や、西淀川高校と連携して自転車走行が危険な場所を調査し、自転車を多くの人々に使ってもらうための自転車マップを作成するといったことなど、都市や地球環境問題に対する活動を行っており、一人一人が真剣に環境問題を考えていかなければいけないとの認識を深めました。

現在、ヨーロッパ等の海外では交通部門における二酸化炭素の排出削減として次世代型公共交通の新路面電車であるLRTの導入を行っており、環境の面からも今後日本でLRTの導入計画を進めて行く必要があると思います。

この地域研修で、教室内だけではわからないことを現地で聞くことができ、普段経験できない貴重な体験になったので、大変意義のある研修でした。

池田 均 セミナ

IKEDA Hitoshi Seminar I



池田 均
地域経済学科
教授

造船業(函館どつく)、 漁業(昆布養殖)、 遺跡(大船遺跡) 見学・研修

- 研修地
函館市
- 研修期間
2007年6月15日～6月16日
- 参加学生数
23名

「技術」が研修のテーマでした。大船遺跡では、この地域に今から9,000年から2,000年前まで続いた縄文時代の竪穴住居や狩猟、農耕具、土器・土偶の発掘から「技術集団」の存在を示唆するアスファルト加工工房址が発見されるなど、縄文人による著しい「技術」進歩があったことが分かります。また、手作業によって「圧延鋼」を船型に合わせて曲げていく熟練技術者の存在なくしては「函館どつく」はない、といわれるように3人の熟練工が巨大な「どつく」を支えていました。また、南茅部の養殖昆布も永年の経験と研究による「技術」が漁業者の高所得を補償していました。

■ 報告資料:別冊資料編P2～P3に収録



37,000トンの進水式

学生報告



昆布養殖業と縄文遺跡

地域経済学科2年
飛田 守 (札幌丘珠高校出身)



大船遺跡(古代の技術)

池田ゼミでは、「函館どつく」と函館市の南茅部町にある「漁協青年部大船支部」、「大船遺跡」を地域研修の対象としました。「漁協青年部大船支部」では、マコンブの養殖についての話を聞くことが出来ました。より多くの人に南茅部の昆布を知ってもらうためIT(Web)を使った、オーナー制という取り組みを行っている事を知りました。オーナー制では1本5メートルの綱のオーナーに年2回格安の値段で昆布を提供していたり、インターネットでいつでもオーナー自身が自分の昆布の状況を見る事ができるようになっています。その他にも、オーナーからの様々な意見・要望が寄せられる中から、少しでもニーズに応えられるように努力しているそうです。その努力の結果、現在ではオーナーの数は全国で100人ほどとなっているそうです。函館での昆布生産量は全国でも上位に入るほどですが、後継者が不足しているという実態がある事も知りました。大船遺跡では約9000年前の縄文時代の遺跡が多く出土していて、この遺跡群は南茅部の広域に分布しており、それらは北海道遺産に認定されています。遺跡には竪穴式住居や土器など数多くの出土品があり、その中には東北地方と交流があったことを示すアスファルトやヒスイに關係する土器も発見されており、当時すでに海を渡り交流の域を広げていた事もわかりました。さらに、国宝に指定されている「中空土偶」も発掘されました。今回私たちが見学したのは南茅部縄文遺跡群のほんの一部でしたが、北海道の縄文時代を実際に目で見て、当時の生活や文化を肌で感じる事が出来ました。

1泊2日という短い研修ではありましたが、地域研修を通して普段の大学生活では目にする事のできない仕事の現場、企業が成功した鍵や現在抱えている問題など、より深い部分の話を聞くことが出来ました。とても企業というものを身近に感じる事ができ、自分にとって貴重な経験になりました。



函館どつくの技術と 進水式

地域経済学科2年
清野 宜彦(石狩南高校出身)



函館どつく前

僕は6月15日と16日に池田ゼミIとして、函館に地域研修に行ってきました。

最初の目的地として訪れたのは、「函館どつく株式会社」です。明治29年11月、津軽海峡に面する函館の地で創業しました。船舶の建造、修理並びに橋梁・産業機械の各分野を中心に東京以北で屈指の総合的な重機械メーカーとして社会の色々なニーズに応じてきました。函館どつく株式会社は函館造船所と室蘭製作所の2カ所に製造拠点を構えており、函館造船所は新造船、修繕船。室蘭製作所は橋梁・産業機械の製作を行っているのです。函館どつくを見学させていただいて一番驚いたのは、船の大変細かい部品を溶接する作業ができる従業員が3人しかいなかったことです。この作業は、とても難しいらしくそれ相応の技術と長年の慣れが必要だということもわかりました。何百という従業員の中で3人だけがこの作業ができる技術を持っているということ。大変驚かされました。この技術があったからこそ函館どつくは、確かな船づくりができ、世界各国から注文を受けているのだと思いました。そして、何より楽しみだった進水式。紅白の幕やくす玉で飾られた船、盛大な音楽もかかってそれはまるで映画のワンシーンのようでした。見学に来ている人達も小さな子供からお年寄りの方まで様々でした。進水式自体は一瞬で終わってしまいましたが、僕達にとっては一生残る大変貴重な経験となりました。この研修を通して、僕達は企業のあり方やそれを支える従業員さん達の日々の努力を学ぶ事が出来ました。

池田 均 ゼミⅡ

IKEDA Hitoshi Seminar II



池田 均
地域経済学科
教授

壮瞥町の農業

- 研修地
壮瞥町
- 研修期間
2007年8月31日～9月1日
- 参加学生数
17名

第一に、「火山と共生」しながら「クリーン農業」を未利用資源を利用した「土づくり」から始め「安心・安全」な農産物を消費者に提供するために取り組んでいる壮瞥町農業の実態、第二に、有機畜複合農法を障がい者の経済的自立を支援しながら実践している「農場たつか一む」（代表・高野律雄氏）、第三に、「火山と地域経済社会」のかかわりを見ることによって、地域農業の逞しい姿を見学・研修することができたと思います。

■ 報告資料:別冊資料編P4に収録



循環型堆肥づくり

学生報告



壮瞥町合同会社農場たつか一む

地域経済学科3年
川端 寛将(北海高校出身)

我々、池田ゼミⅡは壮瞥町にある農場「たつか一む」を見学してきました。「たつか一む」では、障がい者や社会の中で生きにくい人たちが、地域から隔離されず、自然や人との関わりの中で経済的、社会的自立を達成し、かつ安全な農産物の生産により、誰もが安心して暮らせる社会を目指しており、現在、障がいをもつ方々との共同生活を送りながら、7.5hの有機圃場と4,000羽の自然養鶏による有機循環複合農業を営んでいます。有機循環複合農業とは、自家製の発酵鶏糞肥料を野菜作りに利用し、畑で取れた野菜の切れ端などを鶏に与えるといった方法のことです。農業の面では、トマト、ナス、ピーマン、かぼちゃ、じゃがいも、たまねぎ、アスパラなど様々な野菜が栽培されており、新鮮でみずみずしいものばかりでした。養鶏の面では、エサにこだわりをもち、添加物を一切使っていない発酵鶏糞肥料が使われていて、1日に1,800個も産み落とされる卵はインターネットなどを通じ全国に販売されているそうです。また、福祉の面での顔ももっており、2004年にNPO法人「サポートセンターたつか一む」を開設し、ケアホームでの生活、作業活動、創作活動、料理教室、パソコン教室、相談支援事業、ガイドヘルプサービスなどの事業も行っています。今後「たつか一む」では、地域に暮らす障がいをもつ方々に対するサービスの充実や農場事業拡大による雇用利用者の増員と、グループホームの増設を念頭におき、事業を展開していくそうです。



壮瞥町の資源循環の 取組みについて(堆肥センター)

地域経済学科3年
水尻 恵太(札幌藻岩高校出身)

私たち池田ゼミⅡ、二瓶ゼミの合同地域研修は洞爺湖で知られる壮瞥町へ行ってきました。壮瞥町では町づくりの取組みとして資源循環型リサイクルセンターにおける堆肥センターに大きく力を入れていました。この堆肥センターは町内で発生する生ゴミ、家畜の糞、また農業の収穫時に出る稲わらや麦わら等をどうにか資源として再利用することが出来ないかということで建設されました。これにより、農地がやせ、農作物の収量や品質の低下を防ぐことが可能となりました。自分たちで収穫した作物を自分たちで消費するという「地産地消」の枠を超えて、自分たちが消費したものを土づくりから次の作物を生産するという地域による本当の意味での「地産地消」+「リサイクル」であるといえ、小さな町の大きな町づくりになっているといえます。しかし、堆肥というのは一度畑に入れたからといってすぐに効果が出るものではなく、何年も堆肥を入れて、長い年月をかけてゆっくりと再生していかなければならないものです。故に資金がかかり過ぎるなど、努力と時間を必要とする堆肥を使用するのに難色を示す農家もあり、堆肥の良さを知りながらも使用できないという問題も発生しました。このような問題等も有りますが最終的に壮瞥町堆肥センターの取組みは資源循環型の地域社会を目指すと共に、地球サミットを控えている壮瞥町としての環境問題解決への大きな一歩ではないかと思いました。

奥田

仁 ゼミⅠ・Ⅱ

OKUDA Hiroshi Seminar I・II



奥田 仁
地域経済学科
教授

歴史と伝統が息づく 函館の地域経済を 学ぶ

- 研修地
函館市
- 研修期間
2007年9月12日～9月14日
- 参加学生数
25名

研修の目的のひとつは函館の地域経済の問題点や発展への努力を学ぶことであり、もうひとつは実態調査の能力を養うことであった。

このため5グループが、市電の歩み、イカの加工、水産業、中心市街地活性化、観光産業などの課題をもち、専門の市職員5人のレクチャーを聞くとともに、それぞれのグループごとに調査票を設計し、自分たちで企業などのアポを取って聞き取り調査を行うこととした。

最初に敷居をのりこえるのは大変だったかもしれないが、地域の生の声を能動的に聞くことに大きな意義があったと考える。

■ 報告資料:別冊資料編P5～P7に収録



北海道立工業技術センター(函館)でバイオ産業クラスターの説明

学生報告



学生だけの聞き取り 調査で学んだこと

地域経済学科2年
女鹿口 達也(札幌厚別高校出身)



北海道立工業技術センター、機械、技術を実地見学

今回、私たち奥田ゼミは函館市で実地調査を行いました。2,3年生合同の班に分かれ、函館市電、水産加工場、駅前開発、温泉街調査などそれぞれのテーマに基づいて聞き取り調査を行いました。函館は皆さんが知っている通り観光業が主要な外貨獲得の産業であり、地域経済の中核を担っています。私の班は函館の観光を支えているイカを代表とする水産物にテーマを絞り水産加工の現場の現状と問題点を調査しました。調査にご協力くださった工場は個人商店も経営していて、珍味などの加工品も販売していました。調査によって、若い労働力の不足、経営者の高齢化後継者の不足、原油の高騰によって漁獲量が減少し売り上げへ影響することがわかりました。漁獲量の減少に対し自治体側としても人口の漁礁を造り、高品質のものを獲ることで原油高騰の影響を穴埋めしようとしています。以上の問題点から後継者不足を解消することが重要だと感じ、そのためには工場、商店、自治体との連携を強めることが必要だと思いました。さらに、産学連携した研究機関が介入することで加工技術の向上・伝承がスムーズに行き、新たな加工技術が生まれるかもしれません。現在、イカなどの水産物は医薬品の成分、また健康食品の製品開発の動きがあり、新たな需要が期待されています。産学官の連携、さらに農業などと産業関連の結びつきを強くすることで地域内での経済循環を高めることも必要ではないかと感じました。

今回の調査ではゼミ生との親睦を深め、観光も楽しむことができました。研修で得たこの貴重な経験をこれからのゼミ研修、勉強に生かしていきたいと思います。



函館市電の意義

地域経済学科3年
南 康太(札幌清田高校出身)



函館市役所で濃密なレクチャー

函館に行って、市電について調べてみよう。そんな単純な提案から始まった今年の研修でしたが、市電が古い歴史をもち、貴重な存在でありながら、ギリギリの状態で存続している現実を知ることになりました。古くは明治30年に始まり、市民の足として親しまれた函館市電ですが、現在は観光がメインとなって運営が続いています。日に約18,000人が利用していますが、実質的には車の普及や、沿線の住民が郊外の住宅地へ移っていったために、観光客の利用が今後の経営に大きく関わってくるのです。そこで私たちは観光客が求めているニーズや、職員の方の地道な努力を知ることになります。それは観光案内の充実であったり、様々な市電イベントを開催することや市電乗車を組み込んだツアーの誘致活動、純国産の車両を作ることで部品のコストを抑える事や、交通局職員の減給、接遇向上への取り組み等でした。そうした努力があって平成16年度よりついに黒字に転じたそうで、私はそういった経緯を知るにつれ大きな感動を覚えました。

平成13年には函館市電が、北海道遺産にも認定されました。私は今まで札幌の市電にも乗ることが少なく、関心がなかったのですが、今回の研修は、歴史あるものの価値やそれを守ろうという取り組みの難しさなど考えるきっかけになりました。

古いものを今にどう生かしていくか。また歴史あるものは私たちの財産である。あなたが今度市電をみたらそういった視点でみて欲しいと思います。

川村 雅則

ゼミ I
KAWAMURA Masanori Seminar I



川村 雅則
経済学科
講師

「財政再建団体」 夕張市における 現地調査(見えない 事実の発見)

- 研修地
夕張市
- 研修期間
2007年9月3日～9月5日
- 参加学生数
10名

ゼミナールIでは、財政再建団体入りをした夕張を訪れた。夕張はなぜ財政破綻に陥ったのか、また、再建団体入りしたことで夕張はどうなっているのか、等々の情報はマスコミ等でも十分に得ることができるかもしれない。だが、現地を訪問して、直接話を聞くことで見えてくるものもある。そう考える。夕張の厳しい現状を前に予断は許されないが、今回の研修では、夕張再生に向けた現地での様々な取り組みなども学ぶことができたのではないかと。

■ 報告資料：別冊資料編P8～P14に収録



「夕張のこれからの観光のあり方は？」

学生報告



夕張を訪ねて

経済学科2年
林 城治(別海高校出身)



夕張高校の進路・就職状況について聴講中

夕張市は2006年に財政再建団体への移行を表明し、現在に至るまで新聞やニュースを賑わせてきました。私たちのゼミでは、そういうマスコミの情報からだけでなく、実際に夕張市を訪問して現地の人々から多くを学ぶことにしました。

地域研修の初日は夕張高校を訪ねて、生徒の進学状況や就職状況について話を聞きました。財政破綻が生徒の進路状況に影響を及ぼしている(今後及ぼす可能性が大である)ことや、就職については、必ずしも賃金水準が高くはない求人や、契約社員など不安定な雇用での求人が増えているとのことでした。市の財政破綻が生徒の一生を大きく左右する進路にも影響を与えているという事実の重さを感じました。2日目は商工会議所で研修を受け、夕張市の産業の歴史や、財政破綻後の市の取り組みについて学習しました。夕張を盛り上げていくには若い力が必要ですが、現実には、財政破綻を機に人口流出が加速し、少子高齢化が全国一進んでいるという厳しい状況にあります。そういう中でも商工会議所では、各種の事業を行ったり雇用創出事業を計画したりしています。忙しい中、私たちに研修の場を設けていただいたことに感謝するのは勿論のこと、そうした前向きな考えに頭が下がりました。

今回の研修を通じて、知識を広げることができたのは勿論ですが、2泊3日ゼミの仲間と寝食を共にすることで、交流を更に深める良い機会にもなりました。普段、座学での勉強だけでは得られない経験を積むことができた有意義な研修でした。



破綻から再生へ

地域経済学科2年
上嶋 祐貴(鹿追高校出身)



夕張スーパーホテルにて

私たちのゼミナールでは、9月3日からの5日までの3日間、夕張市で地域研修を行いました。

ご存知のとおり、夕張市は観光産業の赤字をはじめとする財政悪化が続き、昨年、財政再建団体入りを表明し、毎日のように報道が繰り返されました。そして今年、財政再建団体となってからは、市民に対するサービスがどんどんと縮小し、市民の方々が数多く夕張を離れるなど、厳しい状況にあります。私たちが夕張に訪問したのは、財政再建団体となってから半年後の夕張市という事になります。夕張高校や夕張商店街等を訪れました。商店街の現状をみたり、夕張高校でお話を聞き、色々な意味で厳しい状況を感じました。と同時に、夕張再生への様々な動きを感じることもできました。私達も、この研修を終えた後、夕張再生にとって何が必要かいろいろ考えてみました。例えば、破綻要因の一つに市財政の赤字を隠してきたという問題がありましたが、行政の徹底的な情報開示、NPO団体や市民における積極的な「住民参画」があらゆる場面で必要だと思いました。産業復興面では、個人や団体そして行政が、積極的に市をあげてのイベント等を催したり、企業誘致など様々な策が実施されていますが、これらには学ぶところが多いと思いました。

夕張市の赤字が解消されるのはまだまだ先です。最低水準のサービスと最高の住民負担が課せられていて本当に厳しい状況ですが、確実に一歩ずつ夕張は再生へと歩んでいる印象をこの地域研修では感じました。

川村 雅則

ゼミⅡ
KAWAMURA Masanori Seminar II



川村 雅則
経済学科
講師

ハローワーク求職者調査にみる今日の職場労働の実態と再就職状況

- 研修地
札幌市・旭川市
- 研修期間
2007年8月25日
- 参加学生数
5名

ゼミナールⅡでは、旭川での工場見学のほか、タクシー運転者の労働・生活実態や求職者の労働・求職実態に関する聞き取り調査など幾つかの取り組みを実施し、その成果をインターゼミナール大会で報告した。調査をすればそれでよい、というわけでは決していないが、調査を通じて得るものは多い。規制緩和のもとでのタクシー運転者の過酷な労働・生活実態、求職者のかつての職場労働の厳しさや再就職の困難などを学んだのではない。

■ 報告資料:別冊資料編P15～P18に収録



雨の中、タクシー労働者調査中

学生報告



ハローワーク調査を経験して

経済学科3年
渡邊 祐哉(本別高校出身)

「景気は回復し、戦後最長のいざなぎ景気を超える好景気」といった報道がさかんに流れているが、では北海道の実態はどうなのだろうか。この問いに答えるべく私達はハローワーク前で調査を行った。具体的には、かつての働き方や現在の求職状況を求職者の方々にお聞きし、今日の職場の厳しい労働実態や、地方における再就職の困難さを浮き彫りにすることを目的とした。合計で100人を超える方々からお話を聞くことができた。

この調査からわかったことのひとつは、まず収入水準の低さである。この点は、正規雇用と非正規雇用を分けてみることでよりはっきりと現れてくる。年収が300万円を超える人の割合は正規では全体の半数を超えるのに対して、非正規では1割にも満たない。また、労働時間数を見ると正規では非正規に比べ労働時間が長く、週50時間以上働く人は全体の半数近くに及んだ。中でも30代、40代では長時間労働が多いことがわかった。再就職も容易ではない。現在の求職状況について「あせりを感じている」人が全体の半数以上おり、男性では7割近くの人が焦りを感じていると答えた。また、男女間での再就職への意識の違いもうかがえた。

今回の調査から、地方の雇用情勢はまだまだ厳しいということが浮き彫りとなり、また、働く人達の仕事や生活面での苦勞が感じられた。活字や映像を通じてではなく、働く人達の声を生で聞くことで、情報に踊らされることなく、その実態を把握することができたと思える。



インゼミ大会無事終了、ほつと一息 調査の成果を持参してインゼミ大会に参加 「最近のお仕事の状況について教えてください」



タクシー調査を経験して

地域経済学科3年
鈴木 彰仁(石狩南高校出身)

今年の地域研修では様々な活動を行いました。夏には、規制緩和のもとでいろいろと問題を抱えるタクシー業界を対象に調査を実施しました。具体的には、乗客を待っているタクシー運転者から、仕事や生活の実態について話をお聞きました。一日中かけて200人を超える選手の方々からお話を聞くことができました。

タクシー業界では、2002年に規制緩和が実施されてから車両台数が飛躍的に増えていますが、乗客は減少し続けています。そういう中で、毎日の売上ノルマを達成することが困難になり、給料が大幅に減って、生活を送ることが困難なひとが少なくありません。あるいは、乗客の奪い合いなどタクシー間のトラブルなども起きています。つい先日、札幌圏でタクシーの運賃が値上がりしましたが、上のような状況を考えると値上げもしょうがない気がします。事前学習でタクシー業界の混乱についてだいたい把握はしておいたものの、実際に運転者の方々からお話を聞いてみるのとみないのでは、現状についての理解は全く異なると思います。生の声を聞く重要性というものを、身をもって感じることができました。このタクシー調査のほかにも、ハローワーク前で、求職者の方々から聞き取り調査を行いました。調査で集めたデータを入力し、分析し、検討に検討を加えて原稿を仕上げていくという作業はとても大変なことです。自分の言いたい事を伝える力や文章をまとめる力を身につけるよい機会になりました。

北倉 公彦 ゼミⅠ・Ⅱ

KITAKURA Tadahiko Seminar I・II



北倉 公彦
地域経済学科
教授

グリーンツーリズム・ part 4

- 研修地
長沼町
- 研修期間
2007年9月13日～9月14日
- 参加学生数
50名

グリーンツーリズムを活発に展開している長沼町で、ゼミⅠとⅡの合同で地域研修を行った。今年は、運営協議会の方々から修学旅行生受け入れの状況や課題についてうかがうとともに、それを支える農業の現場で活躍している農業経営者の体験談を聞かせていただいた。パークゴルフや蕎麦打ちも体験した。生き生きとした長沼の人たちの活動ぶりに感動させられた。ご支援いただいた長沼の方々から感謝したい。

■ 報告資料:別冊資料編P18に収録



蕎麦打ち体験

学生報告



有意義だった長沼での研修

地域経済学科2年
白田 祐季(札幌平岸高校出身)

長沼町を訪れたことがなかったので、どんなところか、どんな体験ができるのか、とても楽しみでした。多くの方々からお話を聞くことができましたが、その中で最も印象的であったことは、「転んでもただでは起きない」、「マイナス面をバネにして、プラスに活かしていく」という姿勢は、マイナス思考の私には、とても素敵にみえました。

農業や仕事への取組み姿勢や前向きな考え方など、人間として大切なことを教えていただいたような気がしました。

また、グリーンツーリズムにも興味をもつようになり、一度は経験してみたいと思うようになりました。蕎麦打ちは初めてでしたが、うまく四角にできなかつたり、均等に切ることができなかつたりしましたが、自分で打った蕎麦を食べたときは感慨深いものがありました。また、初めてのパークゴルフにも夢中になりました。

長沼での地域研修では、様々な初めての経験ができ、とても有意義なものとなりました。このような経験をさせていただいた長沼の皆さんに感謝の気持ちでいっぱいです。



長沼のグリーンツーリズム

地域経済学科2年
古木 亮裕(滝川高校出身)

長沼に着いてすぐに、グリーンツーリズム運営協議会の方々から説明がありました。その話の中で印象に残った第1は、グリーンツーリズム活動を始めるに際して、多くの苦労があったということです。農家の収入も増えるし、結構なことばかりだと思えるのに、反対する人がいたことは驚きでした。

第2は、「グリーンツーリズムは慈善事業ではない」という言葉です。修学旅行生を喜ばせるだけが目的ではなく、土産物を買ってもらったり、ホームステイ先の野菜を実家に送るなど、長沼町内にお金を落としてもらうという経済効果も期待しているのです。また、農業体験者がリピーターとなってもらうことによって、さらに効果が大きくなるのです。

2日目は、実際に「農家に行ってみる」でした。「農家もセールスをしなければならない」ということで、スーパーにかけあつたり、直売店に持ち込むなどの努力をしていることを知りました。また、ファームレストランを開いて地元の食材を使って料理を提供したり、長沼から出て行った大学卒業生を雇ったりして、長沼のために役立つとする姿勢をみることができました。

2日間でしたが、実りの多い研修旅行でした。長沼の皆さんに感謝します。

小田清

ゼミⅠ・Ⅱ
KODA Kiyoshi Seminar I・II



小田清
地域経済学科
教授

外国人観光客 増加に伴う地域への 諸影響について

- 研修地
倶知安町・同ヒラフ地区
- 研修期間
2007年8月6日～8月7日
- 参加学生数
21名

昨年と同様、ゼミⅠ・Ⅱ合同で倶知安町・ヒラフ地区において実施した。今回の研修は『外国人観光客増加に伴う地域への諸影響について』をテーマに、主にペンション・オーナー、役場、地域振興課、商工会議所・街の駅の3地点で聞き取り調査を実施した。その結果、コンドミニウム建設による景観破壊は景観協定や条例制定によって防止し、地域の取り組みについては、市街地とヒラフ地区間の夜間無料バスの運行、英語表記による商店街の案内やメニューの作成、住民や観光客のたまり場的な街の駅の設置など、徐々に整備されつつあることが判った。問題の的確な把握とその対応に関し、地域の具体的な取り組みを直接聞いたことは、参加者にとっては大変良い地域研修になったと思います。

■ 報告資料:別冊資料編P19に収録



役場にて

学生報告



倶知安町での地域研修を 終えて

地域経済学科2年
須藤 将仁(旭川凌雲高校出身)

1泊2日の日程で倶知安町を訪れ、地域研修を行ってきました。倶知安町のことはTVニュースや新聞で耳にすることはありましたが、実際にどんな町なのかは研修に行くまでよく知りませんでした。しかし、実際に訪れてみると、いろいろと特色のある町だということが判りました。特に、オーストラリア人など、外国人の増加は道内他地域ではあまり見ることでできない状況で、それに対応するために役場や商工会などでは様々な努力を行っていることが判りました。

その中でも、自分が特に興味を持ったのは、「街の駅」の取り組みでした。この施設は来町(街)する観光客などに様々な地域情報を提供する目的で作られました。この中では、急増する外国人観光客のために、商店街にあるお店を英語のパンフレットで紹介したり、地域住民が自分たちで作ったモノを販売できる「チャレンジショップブース」という物産コーナーが設けられていたり、実際の対応を目にすることができて、とても勉強になりました。

翌日は、観光実体験としてラフティングを行いました。この地域は通年観光として、夏はラフティング、冬にはパウダースノーを売り物にしたスキーと、その季節ごとにいろんな楽しみが出来るように取り組んでいました。次回は違う季節に訪れたいと思いました。

今後、この倶知安町がどのようなまちづくりをしていくのか、興味を持って見ていきたいと思います。



倶知安商工会議所「街の駅」にて

ペンションにて

ペンション前にて



2年目の倶知安町調査から 感じたこと

地域経済学科3年
佐々木 弥基(札幌清田高校出身)

私たちは昨年に引き続き倶知安町で地域研修を実施しました。今年は『外国人観光客増加に伴う地域への影響について』をテーマに、ペンション、役場、そして今回は街の駅とニセコ観光情報学研究会の方々の聞き取りを行いました。そもそも外国人観光客が急増した背景には、雪質が良い、欧米と比較して渡航費用が安い、テロなどの危険性が少ないなどが挙げられ、これがオーストラリア等で口コミで広がり、ニセコの人気上昇へと繋がったようです。

これにより、ヒラフ地区のペンションは、冬期間では予約で満杯となり、この期間だけでかつての1年分の売り上げを達成するところも出てきているようです。また、町内の飲食店やコンビニの売り上げもアップし、地域経済の発展に一役買っている状況となっている。さらに、街の駅では畳の床を利用し、外国人を対象に茶道を行い、日本の文化に触れてもらう企画も行っている。反面、外資系企業が不動産を購入し、分譲マンション(コンドミニウム)建設も相次いでいます。そこで、地元住民が「景観条例・協定」を定め、景観の維持に努めている。

今はニセコブームで沸いているが、「このブームが終わったときに地域はどうなってしまうのか?」という心配がある。今回の研修では、倶知安町の現状が良く判り、地域の住民を中心に、諸課題への対応が前年度の調査時よりは進んでおり、より一層の活性化に向かっていくように思われた。今後、この倶知安がどのように変わっていくのかに関心を持って見つめていきたいと思った。

高原

一隆 ゼミⅠ・Ⅱ

TAKAHARA Kazutaka Seminar I・II



高原 一隆
地域経済学科
教授

ニセコから 地産地消を考える

- 研修地
ニセコ町
- 研修期間
2007年8月22日～8月24日
- 参加学生数
13名

研修地は昨年に続いてニセコ町で実施した。ゼミⅠは、農業と観光・リゾート産業の現実を実際にその目で知ること为目标にした。ゼミⅡは、昨年の経験をふまえ、経済の主要な担い手にアンケート（商店街のお店でアンケート）することによって、産業の実態をより深く知ること为目标にした。

ややハードなスケジュールであった昨年より少しゆったりしたスケジュールにしたこともあって、落ち着いた良い研修が出来たと思う。

■ 報告資料:別冊資料編P20～P22に収録



ニセコ山系の神秘的な神仙沼

学生報告



ニセコ町での三日間を 振りかえって

地域経済学科2年
西村 亜美(札幌清田高校出身)

私たち高原ゼミナールでは8月22日～24日の3日間、「地産地消の可能性に関する実態調査について-ニセコ町の農業と観光を結ぶ-」という研修テーマに基づいて3年生の先輩たちと合同でニセコ町へ行きました。ゼミⅠの私たちは地域研修に行くのは初めてだったのですが、先生や先輩の皆さんに手伝っていただきながら何とかこの研修を終えることが出来ました。

研修の内容は主にヒアリング中心でした。ニセコ町商工会やJA羊蹄、町役場、ホテル甘露の森でニセコ町の実情を話していただきました。

道外の企業がニセコにあるホテルを買収していること、さらに豪州からなどの外国資本の増加や、ニセコ町民の地元離れ、後継者の不足などさまざまな問題を抱えていることがわかりました。慣れないヒアリングばかりで多少疲れもありましたが、ヒアリングだけではなくニセコ町の方々と直接お話しすることが出来、さらに高橋牧場や神仙沼などの観光も出来ました。この3日間は私にとってとても充実した研修になりました。



えぞ富士と称される羊蹄山の雄姿

頑張ってアンケートとっている最中

研修の合間にちよいと一息



ニセコ町商店街の活気

地域経済学科3年
佐藤 駿太(浜頓別高校出身)

私たち、高原ゼミナールでは8月22日～24日の3日間にわたってニセコ町へ「地産地消」をテーマにして地域研修を行ってきました。そして、役所や農協等のヒアリング組とニセコ町商店街に実際に足を踏み入れてアンケート調査をする組の二手に分かれて調査行動しました。私自身は、アンケート調査組に属し、商店街の様々な人々と接することができました。ニセコ町の商店街は高齢化が進んでおり、50代、60代の方が経営している店舗を多く見かけることができましたが、それらの店舗には後継者がいないため自分の代で店を閉めるつもりの人が多くいて、商店街の将来が必ずしも明るくないように感じました。その他、商工会を中心とした商店間同士の協力があまりされていないという実態も見えてきました。これは、商店街の商店一つ一つが他店と協力しなくても、今まで蓄えてきた財産で生計が成り立っている為だ、との意見も聞きました。しかし、こうした現状を打破しない限り、近年は良くても10年、20年先には商店街の活気はドンドン衰退していきだろうと考えられます。これを打破するには、商店の経営者1人1人が危機感を持たなくてはだめではないかと感じました。

ニセコ町の経済について、2年間にわたって調査してきましたが、実際に街頭アンケート等を行い、将来の自分にとってとてもためになる充実した地域研修となりました。

竹田

正直 ゼミⅡ

TAKEDA Masanao Seminar Ⅱ



竹田 正直
経済学科
非常勤講師

人口減・公共事業費減の下、地域の持続的発展に貢献する企業の学習

- 研修地
小樽市・余市町・石狩市新港西地区及び浜益区
- 研修期間
2007年8月24日～8月26日
- 参加学生数
8名

本年度からバスのチャーター費用が、文部科学省と大学の負担となり、従前よりも期間と見学施設が拡大されたことを先ず、感謝したい。

研修では、人口減や公共事業費減の下で、1)地域の持続的発展に貢献している企業の学習(田中酒造、ニッカウキスキー、アイワード石狩工場、佐藤水産)、2)歴史・文化・産業観光施設見学(日本郵船資料館、余市水産博物館、浜益郷土資料館等)、3)「はまます・ふうどフォーラム」への参加、を実施した。

■ 報告資料:別冊資料編 P22～P23 に収録



北前船(3分の1)を観る、余市水産博物館

学生報告



地域研修を終えて

地域経済学科3年
牧野 克治(滝川高校出身)



よいちニッカウキスキー工場見学のとき

まず地域研修の全行程が終了したとき、本当に良い経験になったと感じました。北海道という地域で何が生まれたか、また何が出来るかなどということを思わず考えてしまう3日間でした。初日は小樽、余市、石狩を移動するやや忙しい日程ではありましたが、内容は濃く来て良かったと思えるところばかりでした。翌日はこの研修のメインでもあった、「はまます・ふうどフォーラム」に参加しました。このフォーラムで一つ分かったことは、浜益がどれだけ人々に愛されているかということでした。実際にこのフォーラムに参加した人は多く、パネルトークでも基調報告に対する質問や、それに対する意見なども飛び交い、浜益に対する人々の熱い想いが伝わってきました。その後、浜辺で夕食会を行い、みんな楽しく盛り上がったので、この「ふうど・フォーラム」は大成功であったのではないかと思います。

今後こういった浜益のようなまちに対し我々がどう接するか、また何が出来るか、という今まであまり考える機会の無かった大きな課題に対し、現地で生の声を聞き、現地の人々と一緒に向き合うという点で、この研修に大きな価値を感じました。またこの研修は多くの方々の御協力無しでは成り立たなかったと思います。この研修を支えてくれた方々に感謝します。



新たな取り組み

地域経済学科3年
澤田 貴裕(旭川凌雲高校出身)



石狩浜益ふうど・フォーラム参加、千本ナラ

施設見学で特に印象的だったのは、アイワード石狩工場です。ここでは、最近導入したドイツ製の何億円もする最新型印刷機を稼働させての作業工程を真近くで見ることが出来ました。また、アイワードは「男女や障がい者の差別をしない」という経営方針の実践、地球環境問題への対応など、技術面だけではなく様々な形で社会に貢献している企業だと知ることもでき、今後このような取り組みをしていく企業が増えればいいと思いました。

「はまます・ふうどフォーラム」では、浜益の風土を深く知るために、名所旧跡を巡ったり、パネルトークがありました。名所旧跡では、初めて見るものばかりでとても新鮮な時間となりました。パネルトークでは、浜益を「風」・「ユーカーラ」・「森林(もり)」の三つの視点からみたお話がありました。特に、伴次雄氏の「森林(もり)」についての基調報告のなかで、「森林(もり)と人間が共生しあうことが大切」だとおっしゃっていた通り、現代の地球温暖化問題にも密接に関係していると言えるので、環境保護について一人ひとりが考えていくことの重要性を改めて実感することが出来ました。

今回の地域研修では、企業の雇用や労働環境などの新たな取り組み、浜益についての歴史や文化など、現地に行って初めてわかったことが沢山あり、とても刺激的な地域研修でした。

最後に、施設見学でガイドをしてくださった方々、「はまます・ふうどフォーラム」の関係者の方々、バスのドライバーの笠谷さん、今回の地域研修でバスのチャーターの実現を可能にくださった経済学部の先生・事務の方々、そして竹田先生ありがとうございました。

西村

宣彦 ゼミⅠ・Ⅱ

NISHIMURA Nobuhiko Seminar I・II



西村 宣彦
地域経済学科
講師

知床における持続 可能なツーリズムと 斜里町のまちづくり

- 研修地
斜里町
- 研修期間
2007年8月27日～8月30日
- 参加学生数
21名

知床財団では自然保護の取り組みや、世界自然遺産指定に伴う影響・問題点をわかりやすく解説していただいた。知床五湖ではガイド付きツアーに参加し、自然を体感しつつ自然の大切さを学んだ。学生はキャンプ場に出没したエゾ鹿や朝晩の釣りですらに知床の自然を体感したに違いない。斜里町役場ではマチの歴史・産業・自治体運営の現状を学び、三位一体改革の影響や病院問題、第1産業を中心とした産業の状況について話を伺った。

■ 報告資料:別冊資料編P23に収録



知床では人と野生生物が身近に暮らしている

学生報告



日本で三番目の世界自然遺産

地域経済学科2年
高島 和弥(大麻高校出身)

今年の西村ゼミは世界自然遺産、知床に行ってきました。2005年に登録されたばかりの土地でどのような変化が起きたのか、また事前に調べたことを実際に確かめることが出来る、こんな機会はめったにないので楽しみ半分、不安も半分の初めての地域研修でした。

バスで8時間北海道の東端までの道は遠く正直行くだけで疲れました。しかしちょうど海岸線を走っていたのですがその景色の素晴らしさは札幌では絶対見るところが出来ないものでした。次の日、知床自然センターにて知床財団の方よりレクチャーを受けました。普段は熊が出ているか確認するために知床五湖を巡回したりしている方で熊についての話は興味深かったです。熊に出会ったときの対策、出ないようにする対策を教えてくださいました。こういう話を直接聞き知床は熊とある程度共存していると思いました。熊が出たらどうする、出ないようにするにはこうすると住民が共通理解していると感じました。大げさかもしれませんがこうしたひとつひとつの自然への取り組みが住民の自然への意識を高めて、強いては世界自然遺産に認定された理由のひとつかなと思いました。全然書ききれませんが他にも知床五湖やオロンコ岩、知床峠など観光名所も行きました。さらに斜里町役場で財政状況について直接聞くことが出来ました。

実際に見て感じる事が出来る貴重な体験をさせていただきました。そして自然を大切にす本
当の意味を少しわかった気がします。



知床最高峰・羅臼岳を知床峠から拝む 知床財団の田中氏からレクチャーを受ける ネイチャーガイドと知床五湖を歩く



それは、心のよりどころ、 マジでいいところ知床!!

地域経済学科3年
村上 慎吾(士別高校出身)

私たち西村ゼミは、地域研修で世界遺産に認定された知床の自然とはどれほどのものか、そして世界遺産に認定されたことでその知床周辺の地域の経済にはどのような影響を及ぼしているか学ぶために知床に行ってきました。

札幌から片道7時間の移動は少なからず疲れはしましたが、知床の自然はそんな私たちを癒し迎え入れてくれました。現地では、知床財団に行き、世界遺産知床の現状や問題、そしてそれを支える知床財団の財政についてのレクチャーを受け、自然保護団体の現状、様々な苦勞を知り、自然を守る人たちは高い志を持って仕事していることを知りました。また斜里町役場に行き、知床周辺の地域の財政について学ぶことができ、地方財政の厳しさを改めて実感することができました。

そして知床では、オシンコシンの滝、知床五湖、オロンコ岩など数々の観光スポットにも行くことができました。どれもとても雄大で自然の素晴らしさを感じました。特に水平線に沈む夕日は本当に綺麗でした。しかし、そんな自然も心無い観光客のせいで、汚されている事を知り、私たちはすごい腹が立ちました。みんなで自然を守っていくという意識がとても大切だと感じました。

知床の研修では私たちは勉強だけでなく心も豊かに感じるようになったと思います。普段何気なく感じている自然がとても素晴らしく思いました。3泊4日の知床研修はホント良き思い出になったと思います。

二瓶

剛男 ゼミ I

NIHEI Takeo Seminar I



二瓶 剛男
地域経済学科
教授

函館市の産業(造船・昆布養殖)および 壮瞥町の観光と農業

■ 研修地

函館市弁天町及び同市白尻町・
壮瞥町

■ 研修期間

2007年6月15日～6月16日

2007年9月28日～9月29日

■ 参加学生数

3名

研修目的は、函館の特徴的産業について生産=技術工程を実見し生産=経済関係を観測すること、および火山=観光地壮瞥町における農業生産の実態を見聞することとした。

研修成果は、シリーズ生産32千重量トン型撒積運搬船スーパーハンディ32の建造工程をつぶさに見学し、技術設備・労働力の集約的過程を感得したこと、高級真昆布の養殖成功事例に感銘するとともに沿岸漁業の就業者減少に問題を見出したこと、観光地にも自給だけでなく産業としてクリーン農業・火山熱利用農業が展開する可能性を認識したこと、などである。

■ 報告資料:別冊資料編P2～P4に収録



函館どつく函館造船所で説明を聞く

学生報告



函館地域研修を 終えて

地域経済学科2年

嶋村 翼(東陵高校出身)



曾根直紀(地域経済学科2年)と私の2名は、池田ゼミ研修Iと合同で「函館どつく」と「南かやべ漁協」を主に研修しました。まず、初日は「函館どつく」の歴史と現状について見聞きました。「どつく」は明治29年創業、本年で111年もの伝統があります。中国・韓国などが力を伸ばしてくる中で、日本造船業も需要が多く高水準の生産を維持しています。しかし、毎年従業員数は着実に増加する一方、現場作業者の高齢化が進み、ロボットには決して真似できない「ぎょう鉄」作業の現場技能の伝承が危ぶまれてもいます。この地域研修は、いままで知らなかったことを数多く学ぶ機会になりました。少子高齢化で技術の伝承が難しいとは思っていましたが、その反面このように従業員数が増えているとは思いませんでした。多くの人が造船業に少しでも興味を持ち、それをもり立てることで函館や他の地域経済もさらに豊かになると感じました。

2日目は南かやべ漁業協同組合を訪問し、組合員の方々にお話を伺いました。この漁協は旧南茅部町内6漁協の合併によって平成15年につくられた新しい漁業組合です。南かやべといえ、最も環境にやさしい漁法である大謀網漁業を北海道で初めて取り入れたことや、昆布生産量が国内の約15%を占めていることなどで知られています。組合員の方々の説明で、収入は多いものの年間作業や加工作業の手間など、苦勞の多い面も理解できました。研修でお世話になった方々、本当にありがとうございます。(曾根・嶋村記)



壮瞥町の資源循環の 取り組みについて -たい肥センターの事例

地域経済学科2年

小國 雄大(栗山高校出身)



循環型堆肥づくり

壮瞥町では「クリーン農業」の一環として未利用資源循環利用総合対策に取り組んでいます。その一つに「たい肥センター」という施設があります。これは平成16年に建設されました。その建設理由は、地球規模の環境問題に対する対応を地域社会の責任で行うということが明確になってきたことです。廃棄物を不法に捨てる、燃やす、積んでおくということが許されないため、資源を循環することで問題を打破しようと考えたためです。

たい肥センターは管理棟・前処理棟・発酵棟・堆積棟から成り、3人体制で運営しています。資源投入から完成まで約80日です。製品には畜ふん主体のたい肥「新山」、食物残渣物・汚泥系のたい肥「みんなの勇氣」があります。双方とも長期に施肥すれば、土をやわらかくし、水持ち、肥料持ちをよくする効果があります。

資源循環は良いことばかりでなく問題点もあります。第1にコストがかかりすぎることです。そのため利益が出ず、中々ほかの地域で取り組みが進まないのが現状です。第2にたい肥を使う農家の問題です。すぐに効果がでない、資金がかかりすぎるなどの理由で、使用に難色を示す農家が多いのも事実です。

研修後の感想として、壮瞥町の取り組みを根気よく進めることにより全国各地で資源循環の取り組みが普及し、全国的な資源節約に貢献できればよいと思いました。

平野

研 セミ I・II

HIRANO Ken Seminar I・II



平野 研
地域経済学科
講師

外国人労働者の 現状と移住者の歴史、 JICAを通じて 発展途上国の現状を 知る

- 研修地
横浜市・東京都渋谷区
- 研修期間
2007年8月31日～9月2日
- 参加学生数
18名

日本の中心的工業地帯であると同時に、日本から海外への移住者たちの出発地となった横浜の二つの側面を示す2つの施設を見学し、さらに現在の途上国問題に日本が果たす役割をJICA地球ひろばにて学んだ。それぞれの施設についての事前学習を通じて、日本資本主義の成長の原動力、その犠牲になったものについて考えていくきっかけとなった。その現場をじかに見ることによってリアリティを持って議論をすることが出来るようになった。

■ 報告資料:別冊資料編P24～P25に収録



住友造船所での研修

学生報告



地域研修を終えて

地域経済学科2年
本田 慎(別海高校出身)

私たち平野ゼミでは8月31日から9月2日にかけて横浜の住友重機マリンエンジニアリング(追浜工場)と海外移住資料館、東京のJICA地球広場へ行きました。今回の研修の目的は、外国人労働者の現状と移住者の歴史、JICAを通じて発展途上国の現状を知ることでした。

最初に訪れた住友重機マリンエンジニアリング(追浜工場)ではタンカーを造っている工場の内を見学することができました。また完成したタンカーにも乗せてもらい貴重な体験ができました。残念ながら外国人労働者の人々が少なく詳しくお話を聞くことができなかったのですが、今の造船業のことなど様々のことを聞くことができ、とても勉強になりました。次に訪れた海外移住資料館では日本から海外へ移住した人々の歴史や現地での生活、移住者の子孫の証言など様々なことを知ることができました。施設内は多くの移住先で使われた農機具や当時現地で食べていたご馳走の模型など多くの展示物を見ることができました。ここを訪れて移住者の歴史を私たちは忘れてはいけないということを強く感じました。最後に訪れたJICA地球ひろばでは発展途上国の現状や現地で抱えている問題など多くのことを知ることができました。また青年海外協力隊の人から実際に現地で活動した体験談を聞くことができ、とても勉強になりました。

地域研修を終えて、私たちが普段経験できないことを多く経験でき、とても勉強になりました。今後のゼミ活動に活かしていきたいと思います。



集合写真

海外移住資料館での研修

JICA地球ひろばでの研修



造船とJICAをたずねて

地域経済学科3年
堀北 晃平(札幌日本大学高校出身)

今回私たちは横浜にある住友重機械工業、JICA移民博物館、東京にあるJICA地球ひろばの三つを訪れました。

住友重機は、造船業界ではどこよりも早くトヨタ生産方式を取り入れた会社ですが、私たちのような学生にとってあまり馴染みの深いものではありません。それでも実際に工場を見せてもらうと、そこは住友重機のこだわりが詰まった場所なのだ、ということがすぐにわかります。環境への対応、少子化による人手不足、東アジアの成長による影響や原材料価格の高騰など、様々な問題が造船業界に渦巻く中、一つ一つしっかりと対応することができるのはやはり、人がいいからなのでしょう。予定されていた質疑応答の時間をかなりオーバーしてしまっても、嫌な顔一つせずに答えてくれる住友重機の方々だからこそ、飽くなき向上心を持ち続けられるのでしょう。

JICAの二つの施設は、私たちの知らなかったことをたくさん教えてくれました。移民の歴史、内訳、当時の移民に対する考え、移民していった人たちの子孫。日本では在日の問題などがありますが、そういった問題を論じるのなら、まず自国の移民を知るべきでしょう。そして、地球ひろばでは実際に青年海外協力隊としてブルガリアに行っていた人の話も聞くことができ、リアルな実情を知ることができました。

今回の体験は、きっと私たちにとって大きな糧となっていくことでしょう。

古林

FURUBAYASHI Eiichi Seminar I



古林 英一
地域経済学科
教授

サケ漁業を 中心とした産業形成

- 研修地
標津町
- 研修期間
2007年9月10日～9月12日
- 参加学生数
13名

北海道標津町は全国有数のサケ生産地である。サケは北海道のみならず、わが国における重要な水産資源として活用されている。地域研修Iではサケ漁業を中核とした産業形成の実態を学ぶことを目的とした。研修の実施にあたっては標津町の関係諸機関の協力をいただき、サケの漁獲から加工・流通、さらには観光資源としての活用などの実態を、水産加工の作業体験などを通じて理解することができた。

■ 報告資料:別冊資料編P25に収録



新巻鮭づくりの最中

学生報告



地域研修に行って

地域経済学科2年
佐々木 悠希(札幌国際情報高校出身)



新巻鮭づくりの説明

私たち、古林ゼミナールIは9月10日～12日にかけて、標津町へ行きました。学園を出発して約8時間後に標津町のサーモン科学館へ到着しました。ここでは、学芸員の方にサケについて詳しく説明していただき、さらに、標津町で行われている地域HACCPについて教えていただきました。2日目は、サケの加工場見学や実際にサケの加工体験、サクラマス其自然産卵観察を行いました。サケの加工場は、魚独特の生臭いにおいもせず、私が思っていた以上に綺麗でとても驚きました。サケの加工体験は、私たち一人一人が実際にサケの新巻を作りました。サケのエラや内臓を取り除き、塩をかけていくという一見単純な作業ですが、エラなどを取り除く作業が意外と大変で、地元の方たちに手伝っていただきました。自然産卵観察では実際にサケが滝を登る姿を見て感動しました。そして3日目は定置網漁体験をしました。まだ夜が明けぬ午前3時頃に私たちは出港しました。残念ながら、今回は直接漁をする船に乗ることは出来ず、漁をする船を見学という形で、もう一隻の船に乗らせていただきました。漁のポイントにつくと、すぐに引き揚げが始まり、仕掛けておいた網を途中まで機械であげたあとは漁師の方たちが手であげていました。今年は漁獲量が少なめだと聞きましたが、引き揚げている方向に船が傾き、このまま倒れるんじゃないかと思いました。その後、5ヶ所くらいのポイントをまわり、帰ってきて約1時間後にセリが行われました。セリは、正直すぎて何をしているのかわかりませんでした。しかし、ここでは値上げのセリではなく、セリでは珍しい値下げのセリが行われているそうです。

今回の研修で、こうした普段経験できない貴重な体験ができたことは本当によかったです。



地域研修に行って

地域経済学科2年
豊吉 健太(札幌月寒高校出身)



新巻鮭づくり開始

今回、私達古林ゼミIは標津町へ行き、町が取り組むHACCPシステムを学び、実際に船に乗りサケ漁の見学や新巻鮭の加工実習をしてきました。1日目8時間かけて標津町へ向かい、サーモン科学館でHACCPとは何か、このシステムを導入した経緯を学びました。また、サケとはどういった生物なのかを教えていただき、印象に残っている話として、実は、サケは100%の確率で生まれた川に戻ってくるわけではないと知りました。驚きです。宿に着いた私達は地元のをふんだんに使った料理を頂き、大半が移動だったこの日の疲れを癒しました。2日目はまず加工場へ行き前日に学んだHACCPシステムが行われている様子を見学し、別の場所で、名人の方々に手とり足とり教わりながら新巻鮭を作りました。後日家に届いたその新巻鮭は家族で美味しく食べました。またこの日はサクラマスが激流を上がっていく姿を見れ、非常に感動させられました。この時期はどの川を見てもサケが遡上していて、ガイドをしてくれた人から興味深い話も沢山聞けました。3日目は早朝2:30に起床し、漁船に乗り込んで、朝早くから働く漁師さんの姿を見せてもらいました。9月12日でしたが、真夜中は非常に寒く、そんな中働く漁師さんをたくましく思いました。こんなサバイバルのような研修となりましたが、札幌に住んでいては分からない、貴重な体験ばかりの研修でした。

古林

英一 ゼミⅡ

FURUBAYASHI Eiichi Seminar I



古林 英一
地域経済学科
教授

サラブレッド生産の 産業的拡がり

- 研修地
日高支庁管内
(新ひだか町・浦河町・様似町)
- 研修期間
2007年9月3日～9月4日
- 参加学生数
13名

北海道日高地方は世界有数のサラブレッド産地であり、サラブレッド生産は地域経済を支える有力な地場産業として発展してきた。

本研修ではサラブレッドの生産に関する様々な経済主体や生産をサポートする施設を見学し、作業を体験することでサラブレッド生産の実態を学ぶことを目的とした。牧場での作業体験や関係諸機関での研修を通じ、北海道の地場産業であるサラブレッドの生産・育成の実態を理解することができた。

■ 報告資料:別冊資料編P26に収録



牧場の風景(様似・高村牧場)

学生報告

地域研修に参加して



地域経済学科3年
近藤 大介(旭川南高校出身)

わたしたち古林ゼミⅡは、日高町へ競走馬産業の関係施設を見学してきました。

1日目には競りが行われる施設や馬の手術などをする施設の見学をし、職員のかたから馬の競りの方法や、どのくらいの金額で落札されるかなどの色々貴重な話をきかせていただきました。また種牡馬の見学では、1回の種付け料があまりにも高いことと、馬を至近距離でみるとものすごい迫力があることに驚きました。また先生の知り合いの方が経営していらっしゃる牧場へいき、過酷な馬小屋の掃除などを体験することができました。馬糞処理やワラを敷く作業などとても大変な重労働でしたが、私たちを優しく迎えていただき、またとても貴重な体験をさせてくださった、この牧場の方には感謝しています。2日目には、馬の調教施設の見学をしました。ここはものすごくでかい敷地のなかにいくつか建物があり、その中で実際に調教している様子を見ることが出来ました。つぎに、乗馬をできる牧場へいきました。生まれて初めての乗馬なので緊張していたし、なかなか自分の意志どおりに馬を操るのは難しかったですけど貴重な体験でした。

この地域研修で、競馬を支える生産・流通の現場を見学し、また関係者の方の話を聞くことで、いままでは知らなかった競馬産業というものを知ることができ、また同時に大学生活の良い思い出にもなりました。このような貴重な体験ができた地域研修につれていってくださった古林先生に、この場をかりてお礼申し上げます。



乗馬体験

JBBA北海道市場 馬用診療台(軽種馬生産技術総合センター)

地域研修に参加して



地域経済学科3年
三田 亮太(北広島西高校出身)

古林ゼミⅡは、9月3日・4日に馬産地日高地方を訪れ研修を行いました。1日目は、馬の競り(セリ)が行われる北海道市場や種牡馬がいる静内軽種馬場を見学し、さらに高村牧場で牧場作業体験をしました。2日目には、日高育成牧場を見学し、最後に乗馬体験を行いました。

日高地方は日本国内における最大の馬産地で、競走馬の約70%を生産しています。生産者は家族経営牧場が中心で、中には中・大規模経営の牧場もありますが、それはほんの一部です。競争馬は血統が重視されていて、血統が良い馬、特に牝馬よりも牡馬のほうが高値で取引されます。種牡馬もまた、競争成績の良い馬が重要視され、それによって種付料も高額になります。そのため、競争馬生産には種付費の割合が高いという特質があります。また、競争馬は脚を怪我しやすいので、生まれてきた馬が必ず売れるとは限らず、競争馬経営には常にリスクが伴います。

近年では、生産するだけでなく育成にも力が入られています。日高育成牧場では、世界に通用する「強い馬づくり」を目指し、若馬の育成や研究が行われていました。

今回の研修で、普段なかなか見ることのできない施設の見学や、牧場作業体験、乗馬体験などすることができ、とても有意義な研修となりました。

水野

邦彦 ゼミ I・II

MIZUNO Kunihiko Seminar I・II



水野 邦彦
地域経済学科
教授

朱鞠内の 朝鮮人強制労働現場 の見学

- 研修地
幌加内町朱鞠内
- 研修期間
2007年8月20日～8月21日
- 参加学生数
18名

1945年まで、幌加内町朱鞠内では鉄道工事とダム工事にいわゆるタコ部屋労働がおこなわれ、そこには数多くの朝鮮人がふくまれていた。この朝鮮人たちは、言葉もうまく通じないまま危険で過酷な労働をしいられ、死に追いやられることもあった。

ゼミでは夏休み前に 殿平善彦『若者たちの東アジア宣言』(かもがわ出版)を輪読し、その著者をたずね、また現地を訪れてみずからの目で見学するという研修を実施した。参加した学生は相応の衝撃を受けた様子であった。

■ 報告資料:別冊資料編P27に収録



朱鞠内湖畔に建つ「慰霊塔」

学生報告



加害の歴史を 学ぶこと

地域経済学科2年
田川 友貴枝(北海高校出身)



殿平善彦さんのお話を聞く

研修では、ご同行くださった拓殖短大の小野寺正巳先生・橋本信先生に詳しいお話を伺いました。1938年ごろに始まった朱鞠内での鉄道工事やダム工事には、2,967人の朝鮮人が駆り出されました。このうち多くの人は、町で「いい仕事がある」とうまい話でさそわれ、一晩どんちゃん騒ぎで飲んだり食べたりしたあと、何十万という金額の請求書をつきつけられたそうです。こうして借金を背負わされて、タコ部屋労働に駆り立てられるのです。タコ部屋とは、いちど入るとなかなか出られない蜻蛉(せいてん)に由来する名で、仕事から帰ると逃げられないように外から鍵をかけられるものです。食べ物すら満足にあたえられず、病気になる人が続出したといえます。一乗寺住職の殿平善彦さんのお話によると、戦後の日本で反戦運動や原水爆禁止運動、空襲を記録する運動などがくりひろげられてきたことには、もちろん大きな意味があるものの、それらはたいてい被害者の立場でなされた運動であったといえます。これからは加害の体験を知り、加害の歴史を学ぶことが、日本人にもとめられていると思われます。戦争による日本の犠牲者が約310万人、アジアの犠牲者は約2,000万人といわれています。日本の視点だけでなくアジアの視点で戦争について知り、考えることが大切だと思いました。これは決して他人事ではなく、私をふくむ日本の若者が、歴史を学び、和解への努力をしなければならぬ立場にあると感じました。



タコ部屋労働犠牲者の 共同墓地をみて

地域経済学科3年
千葉 剛史(紋別北高校出身)



光顕寺前にて

札幌からバスで4時間あまりの幌加内町は、そば畑が一面に広がる自然豊かな場所ですが、かつてここでおこなわれた名雨線鉄道工事と雨竜ダム工事では、多数の人々がタコ部屋労働を強いられました。タコ部屋には棒頭とよばれる幹部がいて、ここから逃げ出す人夫がいたら銃をもって追跡します。捕まった人夫はリンチを加えられ、気を失っても水をかけてまたリンチを受け、1週間もまともに食事をあたえないまま労働させられたようです。労働の過酷さと栄養失調を主要原因として、日本人168名、朝鮮人45名が亡くなり、その方々は20代～30代であったといえます。こうして犠牲になった人々は、朱鞠内湖ちかくにあった光顕寺(いまは「笹の墓標展示館」)に運ばれて一晩安置されたのち、近くの笹藪にある共同墓地に埋葬されました。ぼくたちはこの共同墓地を訪れましたが、ただ土を山のように盛っただけの、とても墓とはいえないような墓でした。ここに埋められていた遺骨を発掘して遺族に返還する活動をつづけている空知民衆史講座の殿平善彦さんに、ぼくたちは旧光顕寺でお話を伺いましたが、そのさい東アジア共同ワークショップのことも話題になりました。このワークショップは、日本・韓国・在日・アイヌの若者が泊まりこんで遺骨発掘や旧光顕寺の雪降ろしなどの作業をしながら歴史認識を共有し新たな人間関係を築いてゆくもので、国境を越えた友情や愛情が生まれているそうです。

水野谷

武志 ゼミⅠ・Ⅱ

MIZUNOYA Takeshi Seminar I・II



水野谷 武志
地域経済学科
准教授

リサイクル社会の 現状と課題

- 研修地
北見市留辺薬町
- 研修期間
2007年8月5日～8月8日
- 参加学生数
13名

今年度の研究課題は、日本で唯一の水銀リサイクル事業を手がける、野村興産株式会社の先進的な取り組みを学ぶことによって、リサイクル社会の現状と課題を具体的に考えることでした。研修先として野村興産の事業拠点であるイトムカ鋳業所(北見市留辺薬町)を訪れました。研修2日目に鋳業所を見学し、3日目には見学から生まれた自分たちの意見や質問を出し合い、最終日にもう一度鋳業所を訪れて担当者の方と意見交換し、さらに関連する資料やデータについては後日、郵送していただきました。これらの成果として、水野谷ゼミでは研究論文を作成し、大学のゼミナールが全国から集まって論文を発表する、第54回日本学生経済ゼミナール大会(新潟大学)に参加しました。

■ 報告資料:別冊資料編P28～P29に収録



工場見学にむかうゼミ生たち

学生報告



工場の大きさに圧倒!

経済学科2年
原田 大嗣(函館中部高校出身)

この地域研修に参加したくてこの日まで下準備を頑張ってきました。前期ゼミでは、吉田文和著『循環型社会』(2004年発行)をゼミ全員で読んで、リサイクルについて理解を深めていました。地域研修も近くなる頃には見学させて頂く、野村興産株式会社イトムカ鋳業所の関連資料に目を通すことによって、事前にある程度、把握する事が出来ました。

研修当日イトムカ鋳業所を見学し、職員の話も聞いてリサイクルのしくみや水銀について新しい知識も得ました。実際に鋳業所を見て回ると、一つ一つの設備の大きさに驚かされました。例えば、リサイクルの焙焼工程で通るロータリーキルンと呼ばれる設備は使用済み乾電池や蛍光管に含まれる水銀を気化させるために600度から800度で加熱しています。この設備内部はとても暑くて参ってしまうほどでした。加熱して気化された水銀を凝縮させるコンデンサタワーはとても高くて迫力がありました。使用済み乾電池の埋め立て処理により起こる水銀公害が1980年代に報道されたのをきっかけに、全国唯一の水銀処理施設であるイトムカ鋳業所は世間から脚光を浴びました。そして現在に至るまで、地道に蓄積された技術力に基づくリサイクル事業の様子を肌で感じる事ができ、この地域研修を通して良い経験をさせてもらいました。



地域研修を終えて

地域経済学科3年
小島 佑介(札幌篠路高校出身)

水野谷ゼミナールでは経済的な影響を強く与えるような社会問題の中から、自分たちが意欲的に調査・研究を行える社会問題や、関心・興味を持っている社会問題を1つテーマとして定め、関連する書籍や文献による学習と現地調査による学習を行い、ゼミとして合同論文を執筆します。論文は、テーマにした社会問題を細分化し、細分化された分野をゼミ生それぞれが担当して研究・調査を行うという方式で進められています。水野谷ゼミナールでは今年「リサイクル」について研究・調査を行いました。

私たちがリサイクルの実態を調査するために訪れたイトムカ鋳業所は主に、使用済みの乾電池や蛍光管のリサイクルを行っている数少ない所です。そこでリサイクルがどのように行われているかを見学し、講演・質疑応答等を行い、リサイクルに対する理解を深めました。

地域研修によって私が学べたことは、リサイクルの問題を解決するために経済的な視点から可能性を考える、という事でした。鋳業所の人達や、リサイクルに関する書籍・文献の著者の考え方や問題解決の方法は経済的な手法を用いたものであり、リサイクルをビジネスとして確立させ、高度な循環型社会を進めていくというものでした。つまり、社会貢献をすることにより、経済的に利益を得、社会貢献と経済を同時に考えていく、というものでした。このような考えを研究・調査によって学べたことは私にとって驚きであり、大きなプラスになりました。

山田 誠治 ゼミ I

YAMADA Seiji Seminar I



山田 誠治
地域経済学科
教授

函館のまちづくりと 地域メディア

- 研修地
函館市
- 研修期間
2007年10月25日～10月26日
- 参加学生数
13名

この研修では、街づくりのさまざまな取り組みをしている函館の地域メディアについて、地元の新聞社として活躍している函館新聞社、コミュニティ放送の先駆であるFMいるか、そしてまちづくりセンターを訪問し、まちづくりにかかわる人たちの姿とそれを伝えるメディアの役割について考えてきました。現場に直接触れた体験は、頭で考えるのとは違う経験ができたと思います。

■ 報告資料:別冊資料編P29に収録



まちづくりセンターは旧丸井今井の建物です

学生報告



地域を伝える新聞社を 見学して

地域経済学科2年
秦 恵理子(旭川藤女子高校出身)



私たちが訪れた函館新聞社は、函館市と周辺地域で日刊の地方紙を発行しています。設立は1995年11月15日と比較的新しい新聞社ですが、その目的は、読者が求める地元のニュースを伝えることを重視し、政治・経済・事件・スポーツ・市民活動・街のイベント情報などを提供するために、函館圏・渡島・松山管内を中心に取材活動を行っているそうです。

地域に根ざしたメディアとして、全国紙のように、ニュースをひとつの視点から捉えるのではなく、違う視点(例えば読者・記者のそれぞれの立場で考える、とか)から捉えた紙面製作が特徴的だと感じました。

特に、地域新聞として、函館を元気にしよう、と地域を応援するという目標を掲げているのが特徴的で、函館も不況の中、いろいろな課題を抱えており、こういった問題が山積する中、新聞の在り方、地方紙の地域活性化への有効性を見つめ直すことができました。

今後は、TV・インターネットなどの様々なメディアの台頭によって、新聞の存在が希薄になり、特に若者を中心に活字離れが増加し、こういった若年層をどのように惹きつけるかが課題とのことでした。編集局長も、新聞を読んで「考える」という事を身につけてほしい、それが函館新聞社の願いだ、と聞いたことが印象に残りました。私も、他人事でなく、これから新聞を読まなければと強く感じました。



FMいるかを訪ね、 コミュニティ放送を知る

地域経済学科2年
浅沼 健一(深川西高校出身)



私たち山田ゼミは地域メディアが果たす役割を調べる事を目的に、函館市でラジオ放送を行っているFMいるかを訪問し、ラジオのスタジオや放送機器を見学・体験させていただき、説明を受けました。番組製作での工夫や地域活動、放送を行う上での様々な課題があるという事を伺いました。番組内容は地域に密着した情報を中心に構成されていて、地域のイベント情報や、住民参加による番組、音楽、ニュース、また防災・交通情報を放送しています。

FMいるかは全国で初の地域コミュニティFM局で、広い範囲の情報を伝える全国や道内放送とは違い、地域を対象を限定し、「地域のための放送」を行っているということでした。ラジオは新聞やテレビと違い、声のみで情報を伝えるので、話し手の個性、人柄がわかる身近なメディアだと感じました。こうした地域メディアが活発に活動することで、地域も活性化し経済の盛り上がりにつながっていくのではないかと感じました。

今回、初めての地域研修ということでラジオ番組に参加し、多くの方からお話を聞かせていただき、貴重な経験をすることが出来ました。教室の外での研修ということで不安もありましたが、無事に終えることができ良かったです。また、研修全体を通じ、街の良さを知ることができ、地域の人と交流を図り、またゼミとしても親睦を深めることができました。

山田 誠治 ゼミⅡ

YAMADA Seiji Seminar Ⅱ



山田 誠治
地域経済学科
教授

沖縄と地域メディアの役割

- 研修地
沖縄県
- 研修期間
2007年10月15日～10月18日
- 参加学生数
13名

沖縄は、本土とは異なる歴史・文化・地理的な特徴を持っています。

この研修では、その沖縄で多様に展開されている地域メディアについて、地元新聞社、4つのコミュニティ放送局、そしてケーブルテレビとテレビ放送局を訪問しました。そして沖縄という地に根ざし、地元の人たちのいろんな思いから活躍している人たちの姿とそれを伝えるメディアの役割について考えてきました。いろんな人々との交流は、ゼミのみんなには変えがたい経験だったと思います。

■ 報告資料:別冊資料編表4に収録



FM21では生番組に出演させていただきました

学生報告



FMコザを訪ねて

地域経済学科3年
瀬川 祐希子(羽幌高校出身)

沖縄市にあるFMコザでは、たどたどしいしゃべりでありましたが、実際に放送番組に出演してみ、私たちはそこで北海道と沖縄の方言の話や学校の話などをしてきました。

運営している方々が20代の若者で、地元の話や地元の店など音楽情報やイベントを視聴者に提供していました。そういった人たちが地元の活性化に努めているのがわかりました。

またFMコザは沖縄市の昔からある商店街にありますが、実際その商店街に行ってみると、シャッターのしまった店舗など空き店舗が多数ありました。またあまり買い物客もいませんでした。そうしたなかで沖縄の地元の若者が、その商店街で若者が電波を通じて住民をよびこんでいることがわかり、地元を盛り上げようという熱意が私たちに伝わってきました。

沖縄は、歴史的にさまざまな背景があり、また、島という土地柄から、地域という単位の強さが顕著に感じられ、その中でコミュニティ放送は、その主たる目的である地域の活性化・防災情報・地域の細かな情報を伝えるという役割をうまく果たしていたと思います。

また幅広い年齢層の一般住民の番組出演、飛び入り参加歓迎のように、地域住民の積極的な参加が盛んに行われており、まさに地域に根ざした放送局になっていました。そして、その訪問は、強烈に印象に残り、とても楽しいものとなりました。



再認識させられた 沖縄地域メディアの役割

地域経済学科3年
高橋 亮太(旭川南高校出身)

今回、私達山田ゼミⅡ13人は、地域メディアを学習するため、沖縄へと旅立ちました。コミュニティFM局やテレビ局など、多くの場所を訪問し、さまざまなことを見学・学習しましたが、私の印象に残ったのは、今も沖縄に根強く残る戦争に関する多くのことと地域メディアとの関連でした。

私たちは沖縄地域メディアを学習するにあたって沖縄戦と現在の沖縄について考えようと、沖縄に着いて最初に平和記念公園へと向かいました。そこでは、生々しい沖縄戦の惨状や現在も続く基地問題などについて知り、私も含めた各個人に様々なことを考えさせるものでした。

その後、沖縄で最も昔から新聞を発行している琉球新報社を見学した時には、地域メディアの源流が戦時中に既にあったと私は思いました。琉球新報は明治26年に発行を開始していますが、太平洋戦争末期、沖縄が戦地となったときにも塹壕の中から新聞が発行されたそうです。緊急事態であるにもかかわらず、地域の読者のためにできる限り新聞を発行する姿勢に、私は現在に続く地域メディアの源を感じました。

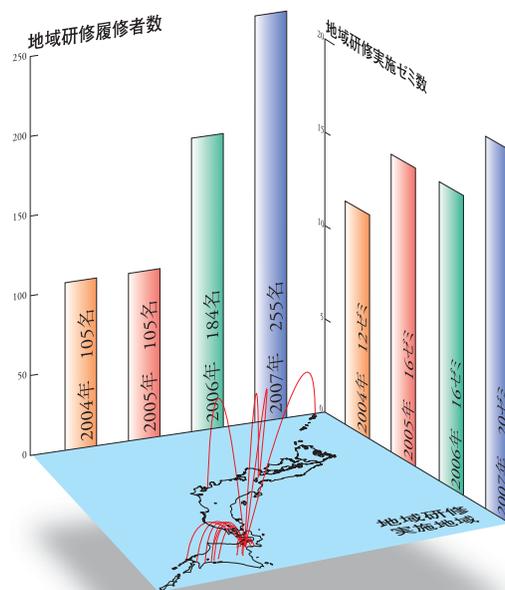
昨年、沖縄で教科書検定問題に抗議する県民集会が開催されたのですが、琉球新報では一面と最終面の二面を見開きの紙面で集会を伝えました。過去の戦争、そして現在の平和維持といった問題はその住民に大きな影響があります。どのように地域メディアが伝えるかによって住民の考え方も変わってくる、ということを改めて認識させられる研修になりました。

地域研修報告書

2007

平成19年度

私立大学教育研究高度化推進特別補助採択事業



北海学園大学 経済学部

[経済学科・地域経済学科]

●お問い合わせは●

経済学部

TEL:(011)841-1161(内線2222)

<http://www.hokkai-s-u.ac.jp>

<http://www.econ.hokkai-s-u.ac.jp>

発行 2008年3月